

一 次の各問いに答えなさい。

問一 次の各文の——線部のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

- 1 新しい大臣になって大きくセイサクの変更がなされた。
- 2 ガイトウでテレビのインタビューを受ける。
- 3 タンシンで敵地に取り込む。
- 4 小説をクラス全員でリンドクする。
- 5 お盆休みを使って帰省する。
- 6 光の屈折について学ぶ。
- 7 駅の南側の改札口から出てくる。
- 8 出典を明記するのが論文のルールだ。

問二 次の慣用句の空欄くうらんにそれぞれ生き物の名前をひらがなで答えなさい。また、その慣用句の意味として正しいものを下段のア～オからそれぞれ一つ選んで記号で答えなさい。

- 1 のなみだ
- 2 の頭も信心から
- 3 の一声
- 4 井の中の 大海を知らず
- 5 の子を散らす

- ア 大勢で議論しても決まらなかったことを、一言で決めてしまうえらい人の発言。
- イ 広い世界を知らず、自分のまわりのせまい範囲はんいだけで物事を考えていることのたとえ。
- ウ 非常に少ないことのたとえ。
- エ たくさん集まっていたものが、いっせいにバラバラになること。
- オ たとえつまらないものでも、信じつづけることでありがたいものに思えてくること。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

一般的に「知的」とは、知識がホウフで、言語的な認識力が高い人のことを言います。同じ事柄を讀んだり聞いたりしたときにも人によってどう捉えるかは違います。認識力の高い人は、より多く、より深く情報を捉え、理解することが出来ます。

一方で、「センスのある人」もいます。知識とは無関係に、感覚的にできてしまう人のことですね。デザインのセンスがある人、音楽のセンスがある人、料理のセンスがある人。とくにきちんと教わったわけではないのに、秀でていてる場合にそういう言い方をします。それはそれで素晴らしいこと。

ここでのポイントは、知性は万人に開かれているということです。センスのほうは、残念ながら努力ではなかなか変えられない部分が大いのです。たとえば音痴で音楽のセンスがない。そうすると、歌ったり演奏したりすることで音楽から大きな喜びを得るのは難しいのかもしれない。

I

、言語が多くの人に開かれているもので、センスをあまり要求されません。

誰でも知識を増やし、深める中で知的になることができます。それに、知的好奇心や知的な欲求は誰もが持っていることを感じます。

私は長年にわたり小学生を集めて教えていたのでわかるのですが、小学生で本が嫌いな子はまずいません。みんな「もっと読みたい、もっと読みたい」と言います。誰もが自然な知的欲求を持っていることを感じます。

II

小学生に人気のある本に『ぼくらの七日間戦争』（宗田理／著 角川文庫）があります。これは内容も濃くて、展開にも深みのある面白い本です。戦争や学生運動のことも描かれています。大筋は、管理教育に抑圧された子どもたちが、マスコミも使って大人に対し主義主張をしていく物語です。簡単にぱっと読める感じではなく、けっこう難しいところもあるのですが、小学生は簡単に読んでいます。「ぼくらの」シリーズなんと累計1700万部を超えているのですからすごい。それだけの子どもたちはが、読んでるわけです。

小学生には読む力があるし、読みたい気持ちがあるのです。年間100冊くらい読む子はザラにいます。このままいけば言語的な認識能力はどんどん高くなっていく……はずが、多くの人は本を読まなくなっていき、大学生ともなれば月に1冊も読まないという状態。成長とも

に読書の楽しみを忘れてしまっているようです。

読書の楽しみは、その本のワールドをじっくり味わうことです。

いわば「味読」^{みどく}です。深い世界に触れて、それを楽しむ心が必要なのです。そういう心がないと、それだけの時間とエネルギーを割けないでしょう。

誰もが本来持っている知的な欲求に基づき、深い世界に触れて楽しむという心を持つことが最初です。

私の授業をとる大学一年生には、最初にこういう話をします。

「ここで道が二つに分かれています。教養のある人生と、教養のない人生。どちらがいいですか」

『論語』^{*1}やデカルトの『方法序説』^{*2}、ニーチェ、福沢諭吉^{ゆきち}、さまざまなものを読むクリエイティブな課題に応えていく中で、「知的で教養のある人生は素晴らしい」という生き方を選ぶのか。「デカルトなんて知らないし」^{*3}などと言いながら生きていく、非知的な人生を選ぶのか。

そう問いかけるともちろんみんな「①」^①と言います。実際、本をたくさん読みはじめると「本を読むようになってよかった」「本を読まないままではだめだ」と思うと恐ろしい^{おそ}と言いはじめます。ポテンシャルは高いのです。ただ読書の習慣がなかっただけです。

本を多く読んでいると、教養のある人の話を面白く感じる^{おもしろ}ことができます。

たとえば黒澤明監督の「蜘蛛巣城」^{くろさわ}という映画は戦国時代の武将の話ですが、シェイクスピアの『マクベス』^{かんどく}を下敷き^かとしています。『マクベス』^{くも}を知らなくても楽しめますが、知っていれば「あのマクベスを戦国武将でやるとこうなるのか。III」^C、さすが黒澤明だ^{うな}と唸^{うな}ってしまいます。深く楽しめま

す。古今東西の名著を引用するというのは、映画や本だけで行われているわけではありません。ジョーク^②、雑談^②だってそうです。教養があれば、何かを踏^ふまえて笑い合うことができます。「あれはマクベス夫人のようだね」と言って笑い合えるわけです。逆に、「これはマキャヴェリズムだよね」と言ったときに「は？」と返されてしまうと、もうそれ以上深く話すことはできなくなってしまいます。

D
本を読むほどに、世界が楽しみであふれます。普通^{ふつう}なら気にトめないものでも、「面白い！」^③と感じるのです。たとえば、「漢字ってなんて

すごいんだろう！」と気づきます。何気なく日常で使っている漢字ですが、一つひとつの成り立ちにはとても奥深い世界があります。漢字の語源、由来についての研究で知らせる白川静さんの本を読むと、本当に面白く感動します。

IV、漢字と身体を結びつけて考えたのが野口三千三さんのぐちみちぞうです。漢字の成り立ちを身体で探っていくという不思議なことをされています。「足」という漢字をつくった人たちの感覚を、足の感覚でたどろうとするのです。深い身体感覚と漢字の文化を結びつけて捉えるとは、なんと面白いことをしているのでしょう。知的なことを面白がる人は、こういうことが楽しいのです。

知的で教養のある人生を選ばない人にとっては、何をしているのかわけがわからないと思います。その分、人生の楽しみが減ってしまうのですが、それに気づいていません。単純な、いかにも「面白がってください」というエンターテイメントに慣れて、複雑な楽しみがわからなくなってしまうです。

端的たんまに言えば、「教養のある人のほうが、人生が面白くなる」ということです。

この世はもっともっと複雑な楽しみにあふれています。その複雑な楽しみに気づき、面白がることができるようになるのです。

(齋藤孝『書ける人だけが手にするもの』)

*1 デカルト……フランスの哲学者・数学者

*2 ニーチェ……ドイツの哲学者

*3 非知的……「知的ではない」の意味

問一 ――線部①く③のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 本文中

 く

 にあてはまる語句としてそれぞれ適切なものを、あとのア～カの中からそれぞれ一つずつ選んで記号で答えなさい。

- ア なるほど イ しかし ウ だから エ さらに オ たとえば

問三 ――線部A「そういう言い方」とありますが、どういう言い方ですか。本文中から七文字でぬき出して答えなさい。

問四 ――線部B「長年にわたり小学生を集めて教えていたのでわかるのですが」とありますが、筆者は小学生を教えて、どのようなことがわかりましたか。最も適切なものを次のア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 小学生の誰もが言語的な認識力が高いということ。
イ 小学生の誰もが大人に対して、主義を主張していききたいと思っているということ。
ウ 小学生の誰もが自然な知的欲求を持っているということ。
エ 小学生の誰もが月に一冊も本を読まない状態になっているということ。

問五 本文中 ① にあてはまる言葉として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 本をたくさん読まない人生
- イ 本をたくさん読む人生
- ウ 教養のない人生
- エ 教養のある人生

問六 ——線部C「戦国時代の武将」とあります。徳川家康が1603年に江戸幕府を開くきっかけとなった戦いの名前を答えなさい。

問七 ——線部D「本を読むほどに、世界が楽しみであふれます」とありますが、読書を楽しむためには最初になどどのようなことをすることが必要だと筆者はのべていますか。本文中の語句を使って四十五字以内で書いて答えなさい。

三

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

その時^Aフミ子から聞かされた話を、俺^{おれ}はとてもすぐには信じる事ができなかった。

きつと、誰^{だれ}だってそうだろう——小さな妹^{いもうと}が突然、自分は誰かの生まれ変わりだと言い出したとしたら。

「うちな、ずーっと小さい頃^{ころ}から、ときどきヘンな夢見たんよ。大きな海のそばでな、知らんおっちゃんとおばちゃん、知らん子供たち遊んどるんや」

そのおっちゃんというのは、福^{ふく}々^々しく太^{ふと}っていて、ガツシリとした体つきをしていたという。おばちゃんの方は逆に細身で、顔にはいつも笑顔を浮かべている。

そして中学生くらいの男子と小学四年生くらいの女の子が一緒^{いっしょ}にいて、自分と遊んでくれているというのだ。その中でフミ子はキヨミと呼ばれていて、やはり、その子供たちの妹らしいのだという。

「フミ子、それはきつと、何かの映画かテレビの場面やないか。ずっと小さい時に見たヤツをたまたま夢に見たんやろ」

「それくらいのことは、うちも考えたわ」

やっぱり七歳^{さい}とは思えない口振り^{くちぶり}で、フミ子は答えた。

「でもな、その人たちの夢を、何遍^{べん}も何遍も見らんや。まるで同じヤツを見る時もあるし、違^{ちが}う景色の時もある。でも、出てくる人はみんな同じで、おっちゃんはお父ちゃん、おばちゃんはお母ちゃんや」

フミ子からその言葉を聞いた時^B、俺^{おれ}はなぜだか、とても不愉快^{ふゆかい}な気分になった。

「そんでな、お兄ちゃんとお姉ちゃんもおんねん。お兄ちゃんは宏一^{こういち}ちゅうて、お姉ちゃんは房江^{ふせえ}や。うちのこと、キヨ、キヨって呼んで、可愛^{かわい}がってくれるんよ。兄ちゃんは、ものすごく勉強^{べんけん}ができてな、大きくなったらハカセになるんやて。姉ちゃんは絵^えを描^かくのが好きやから、絵描きさんになるんやて」

「だから……それは映画や。テレビかもしれん。小さい頃に見たやつやから、自分が見たのも忘れとるんや」

「そうやないよ。だって夢の中で、お兄ちゃんたちは、ちゃんと大きくなってらんやて。初めは兄ちゃんも小ちゃい子供やったのに、夢で見

るたびに、ちゃんと年とってんのや」

「アホぬかせ」

そんな夢を見ていたのかと思うと、フミ子のせいではないとわかっていても、ドヤしつけない気持ちになる。だったら、お前のために苦勞している俺とお母ちゃんは、いったい何なんだ。

「夢の中でお前はいくつやねん」

「うち……初めは小さかったけど、どんどん大きくなった。今の兄やんくらいになって、中学生になって、お姉さんになったわ。高校出たあと、デパートのエレベーターガールになったんや。可愛らしい制服着て、『上に参りまーす、下に参りまーす』って言うてんねん」

フミ子はこたつから出ると、手を上げてエレベーターガールの真似をした。まだ幼児体型のくせに、その立ち方と手つきは不思議と大人っぽく、^②様になっ**て**いた。

『生まれ変わり』という言葉を、その時の俺はどうに知っていた。子供向けではあったが、世界の不思議な出来事を集めた本で読んだことがあったのだ。

たとえば、ちいさな子供が突然、知るはずのない外国語を喋り始める。言葉がわかる人が聞いてみると、自分は以前、別の国で生きていたAという人間であると言う。住んでいた町や家の事を細かに語り、調べてみると実際にその通りの町や家があり、Aという人間も、確かに存在していたとわかる——細かい点に多少の違いはあっても、だいたいこんなパターンの話だったと思う。

子供の多くがそうであるように、俺も怖い話や不思議な話は大好きだった。靈魂の存在を当たり前に信じていたし、ネッシーやUFOも信じていた。テレビでその手の番組があれば、^C瞬きもせず啣り付いていたクチだ。

けれど自分の身近なところで起こったとなれば、話は別だ。フミ子のその話は、俺には到底信じられなかった。いや信じたくないと思っ**て**いたのかもしれない。

「もしかして、この間迷子になったのは」

その人たちのところに行こうとしていたのか？ と聞こうとして、俺は口をつぐんだ。^D

そう尋ねるのは、フミ子の話を認めることになるような気がしたからだ。

「実は、そうなんよ」

E どこかすまなさそうな顔で、フミ子は言った。

「夢の中に、大きい海とお城が見えるねん。でも、すごい田舎っちゅうわけやないよ。何となく古い感じの家もあるけど、普通の家もお店もあるし、電車も走っとる……それで近くに大きな駅があって、看板に彦根^{ひこね}って書いてあるんや」

俺はずっと前に、フミ子に漢字の読み方を聞かれたのを思い出した。その瞬間、何だか背筋が寒くなる。

「フミ子……もし、お前の話が本当やったとしたら、その繁田^{しげた}喜代美っちゅう人は、もう死んどるんやろ」

俺は恐々^{こわくわ}尋ねた。

〈 中 略 〉

その頃にはフミ子の裸^{はだか}を見ることもなくなっていたけれど、まだ赤ちゃんだった頃、湯上がりのフミ子に天花粉^{*1}を振りながら、お母ちゃんが言っていたのを思い出した。

「見てみい、俊樹^{としき}。この子、きつと天使やったんやな。背中に羽のあとがあるで」

そう、フミ子の背中の肩甲骨^{けんこうこつ}より少し低いところに、まるで水滴^{てき}を上下に長く伸ばしたようなアザがあるのだ。

「片っぼだけやん」

そのアザは左側にしかなかったたので、まだ小さかった俺は、そんな白けたことを言ったと思う。

G 「片っぼだけでも、上等^{*2}やんか」

俺の言葉にそんなわけのわからない返答していたのは、お父ちゃんだった。

(朱川湊人『花まんま』) 設問の関係で本文を一部変更しています。

*1 天花粉……白いでんぶんの粉。汗もやただれの予防として用いられる。

*2 上等……優秀。上出来。

問一 ……線部①～③の本文中での意味として最も適切なものをそれぞれあとのア～エから選んで記号で答えなさい。

① 「福々しい」

ア おだやかで、いかにもゆたかな感じ
ウ すがたやかたちが整っている感じ

イ にくたらしいほどずうずうしい感じ
エ 全体がふっくらもりあがっている感じ

② 「様になる」

ア 真似をすること
ウ えらそうな態度をとること

イ ふてぶてしい態度をとること
エ その場にぴったり合っていること

③ 「^{かじ}噛り付く」

ア くちびるをかんでくやしがつている様子
ウ しっかりとつかまってはなれない様子

イ 目を見開いておどろいている様子。
エ その場に立ちつくす様子。

問二 ——線部A「フミ子から聞かされた話」とはどんな話ですか。二十五字以内で書いて答えなさい。

問三 — 線部B「俺はなぜか、とても不愉快な気分になった」とありますが、その気持ちを表現している一文を探して、最初の五字をぬき出して答えなさい（句読点も字数に数えます）。

問四 — 線部C「その手の番組」とありますが、どんな内容の話ですか。本文中から九字でぬき出して答えなさい。

問五 — 線部D「俺は口をつぐんだ」とありますが、なぜですか。その理由が書かれている部分を二十三字で探して、最初の五字をぬき出して答えなさい。

問六 ——線部E「どこかすまなさそうな顔」とありますが、なぜですか。その理由として最も適切なものを次のア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

- ア このあとの話の内容が温かい内容だったから。
- イ このあとの話の内容が悲しい内容だったから。
- ウ このあとの話の内容が興味深い内容だったから。
- エ このあとの話の内容がつまらない内容だったから。

問七 ——線部F「背筋が寒くなる」とありますが、なぜですか。その理由として最も適切なものを次のア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

- ア フミ子のエレベーターガールの真似が不思議と大人っぽかったから。
- イ フミ子が話す夢の内容があまりに現実のようだったから。
- ウ フミ子がずっと小さい時に見た映画やテレビの場面を話だしたから。
- エ フミ子の話が本当だったとしたら、繁田喜代美という人が亡くなっているから。

問八 ———線部 G 「片っぼだけでも、上等やんか」とありますが、お父ちゃんは何に対して、そしてなぜ「上等」だと言ったのですか。本文の語句を使って、四十五字以内で書いて答えなさい。

問九 本文中の「**きっと**」と同じ意味・用法の「きっと」を使って短文を作りなさい。ただし、解答には主語と述語を必ず使いなさい。また、本文の語句や文を利用しただけの解答は不正解とします。